

3月の発生予報および防除上の注意事項

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

沖縄群島

1 水稲

スクミリンゴガイの防除対策について

- 耕耘等によって機械的に殺貝する。
- 苗移植後は水深をできるだけ浅水(水深1cm以下)で管理する。
- 餌や産卵場所となる水路周辺の雑草を除去する。
- 貝及び卵塊を地域ぐるみで捕殺し貝密度を下げる。

2 さとうきび

黒穂病の防除対策について

- 毎年3月中旬頃から主に株出し圃場において黒穂病が発生する。
- 生育初期は発病株の識別が容易で、抜き取り作業もしやすいので早期防除に努める。
- 胞子の飛散を防ぐため、発病株は鞭状体の出現前に抜き取り処分する。
- 抵抗性品種を植え付けるようにする。
- 苗の薬剤浸漬処理を行う。

3 マンゴー

開花期の病害虫防除対策について

- 開花期を迎えたこの時期は、花穂を中心に炭そ病、うどんこ病、チャノキイロアザミウマやチャノホコリダニなどの病害虫が発生する。
- 病害虫の発生程度はまだ低いものの、今後、気温の上昇とともに増加すると予想されることから、早期発見・防除に努める。

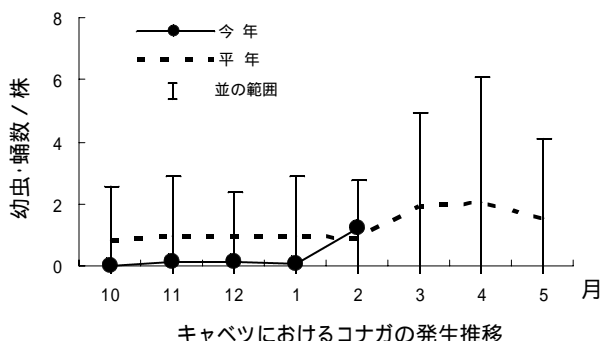
4 キャベツ

(1)コナガ

発生程度： 並

予報の根拠

2月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は1.2頭(前年0.5頭、平年0.9頭)と平年並であった。



防除上注意すべき事項

- 圃場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残渣処理を徹底し圃場衛生に努める。
- 薬剤散布は低密度時が効果的である。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避ける。

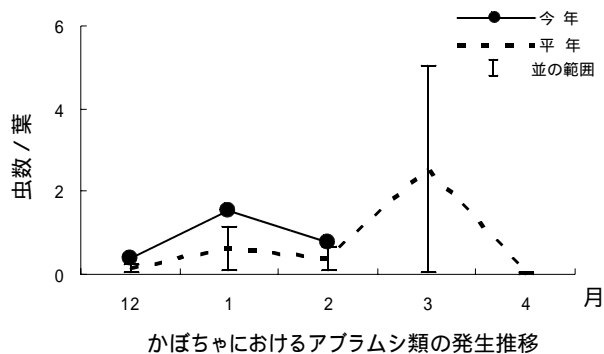
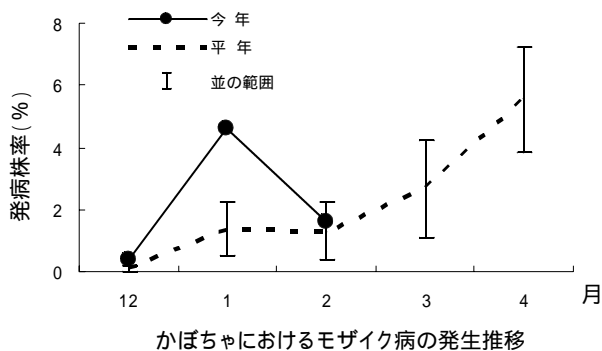
5 かぼちゃ

(1) モザイク病

発生程度: やや多

予報の根拠

- 2月下旬の調査の結果、発病株率は1.6% (前年2.0%、平年1.3%)と平年並であった。
- 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.8頭 (前年0.3頭、平年0.4頭)と平年よりやや多かった。
- 気象予報では3月の気温は平年並か高くなる見込みで、本病の媒介虫であるアブラムシ類の増加に注意が必要である。



防除上注意すべき事項

- アブラムシ類の圃場への飛来侵入防止と防除を行う。
- 発病株は発生源となるので見つけ次第抜き取り、ビニール袋等に入れるなどして密閉処理する。
- 平成17年度病害虫発生予察注意報第4号 (平成18年1月31日付け) 参照。

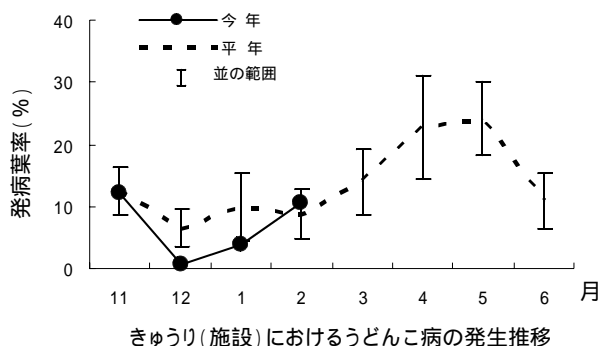
6 きゅうり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度: 並

予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は10.5% (前年13.0%、平年8.8%)と平年並であった。



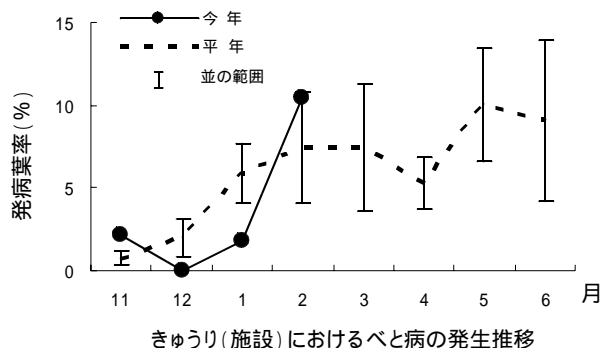
防除上注意すべき事項

- 窒素質肥料の多用や偏用を避ける。
- 密植を避け透光通風を良くする。
- 老葉や病葉は発生源となるので、施設内外に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので早期発見、早期防除に努める。

(2)べと病

発生程度： 並
予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は10.5% (前年14.5%、平年6.4%)と平年並であった。



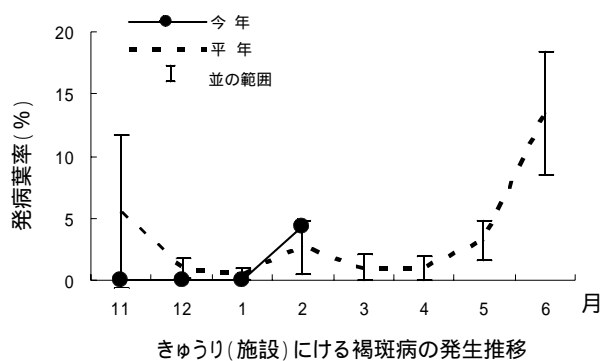
防除上注意すべき事項

- 換気をよくし、多湿にならないよう努める。
- 老葉や病葉は発生源となるので、施設内外に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。

(3)褐斑病

発生程度： やや多
予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率4.3% (前年11.5%、平年2.6%)と平年並であった。



防除上注意すべき事項

- 換気をよくし、高温多湿にならないよう努める。
- 老葉や病葉は発生源となるので、施設内外に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので早期発見、早期防除に努める。

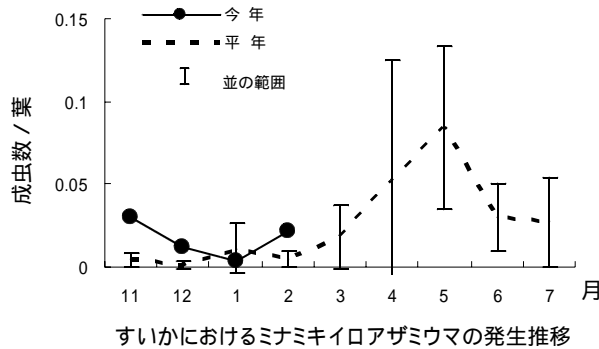
7 すいか

(1) ミナキイロアザミウマ

発生程度: やや多

予報の根拠

- 2月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.02頭(前年0.02頭、平年0.01頭以下)と平年より多かった。
- 一部圃場と一部育苗施設で多発生が認められた。



防除上注意すべき事項

- 本種はスイカ灰白色斑紋病を媒介するので防除においては以下の事に注意する。
- 育苗段階での管理を徹底し、苗による持ち込みを防ぐ。
- 収穫後は蒸込みを十分に行い、青色粘着テープ等により本種の発生がないことを確認してから定植する。
- すそや側窓からの蔓や葉の露出は、本種の繁殖場所となるだけでなく、施設内侵入を容易にするため、すそや側窓は閉じる。
- 平成17年度病害虫発生予察注意報第3号(平成17年12月1日発表)参照。

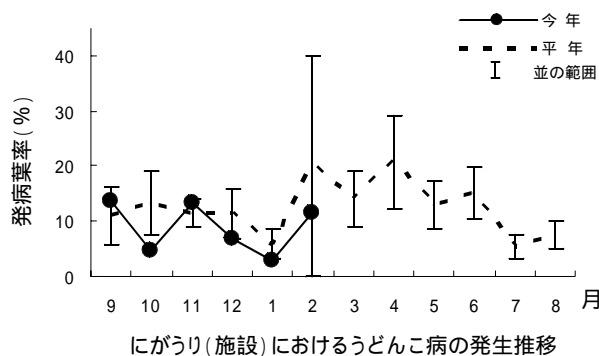
8 にがうり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度: 並

予報の根拠

2月下旬の調査の結果、発病葉率は11.4%(前年4.6%、平年20.0%)と平年並であった。



防除上注意すべき事項

- 老葉や病葉は発生源となるので、施設内外に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 窒素質肥料の多用や偏用を避ける。
- 多発すると防除が困難になるので早期発見、早期防除に努める。

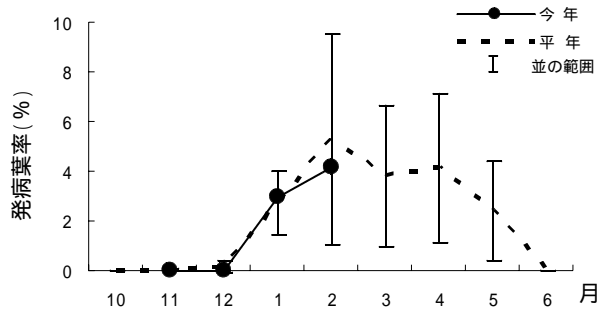
9 トマト(施設)

(1)うどんこ病

発生程度： 並

予報の根拠

2月中・下旬の調査の結果、発病葉率は4.2% (前年6.2%、平年5.3%)と平年並であった。



トマト(施設)におけるうどんこ病の発生推移

防除上注意すべき事項

- 老葉や病葉は発生源となるので、施設内外に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 窒素質肥料の多用や偏用を避ける。
- 多発すると防除が困難になるので早期発見、早期防除に努める。

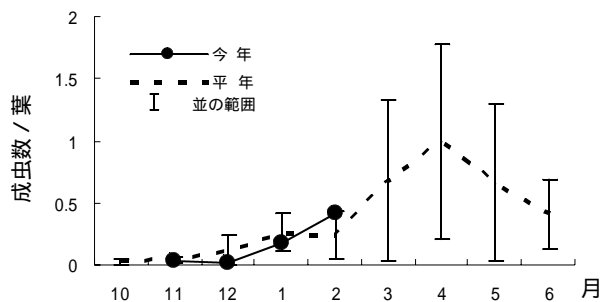
10 なす(施設)

(1)ミナキイロアザミウマ

発生程度： 並

予報の根拠

2月中・下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.42頭 (前年0.67頭、平年0.24頭)と平年並であった。



なす(施設)におけるミナキイロアザミウマの発生推移

防除上注意すべき事項

- シルバーポリマルチの利用、および入口、天窓、側窓にはネット資材等を張り成虫の飛来侵入を防ぐ。
- 摘葉等による残渣は、本種の発生源となるのでビニール袋等に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避ける。

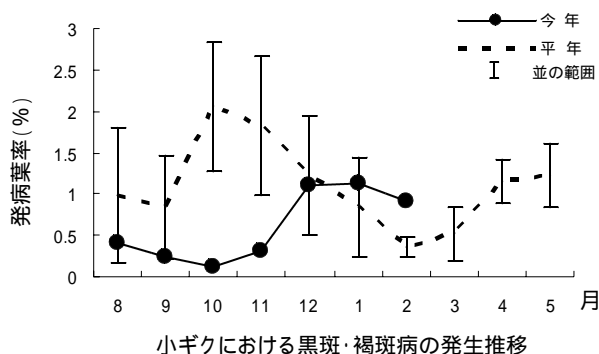
11 キク

(1) 黒斑・褐斑病

発生程度：やや多(小ギク)

予報の根拠

- 2月下旬の調査の結果、発病葉率は0.92% (前年0.43%、平年0.36%)と平年より高かった。
- 一部圃場で多発生が見られた。



防除上注意すべき事項

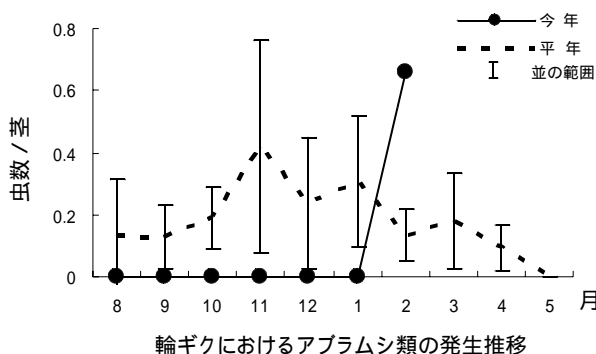
- 発病初期の防除を徹底する。
- 発病葉は除去し、通風、採光を良くする。
- 圃場の排水に努める。
- 摘葉等による残渣は、圃場の外に持ち出し処分する。

(2) アブラムシ類

発生程度：多(輪ギク)

予報の根拠

- 2月下旬の調査の結果、茎当たり虫数は0.66頭(前年0頭、平年0.13頭)と平年より多かった。
- 一部圃場で多発生が見られた。
- 気象予報では3月の気温は平年並か高くなる見込みで、アブラムシ類の増加に注意が必要である。



防除上注意すべき事項

- 薬剤は心葉部や葉裏に十分かかるように散布する。
- 発生初期の防除を徹底し、同一・同系統薬剤の連用を避ける。
- ほ場内及び周囲の雑草は発生源になるので除去する。